

# 竹内好と文化大革命—映画『夜明けの国』をめぐって

土屋 昌明

## はじめに

どのような態度で中国に向きあうべきか、という問題について、今日ほど確信が持てない状況は、戦後の現代史においてかつてなかったのではなかろうか。その原因の詳細はひとまず措くとして、一つだけ言えるのは、中国の経済大国化によって、従来まで通用した中国への向き合い方—たとえば「友好」—などの言葉が呪力を失いつつあることだ。

それゆえ、少なからぬ中国研究者が、かつて自分たちはどのように中国に向きあってきたか、を考えることによって、如上の問題にヒントを見いだそうとしている。その動向の中で再考されている人物の一人に竹内好がいる。例えば鶴見俊輔・加々美光行編『無根のナショナリズムを超えて—竹内好を再考する』(日本評論社、2007年)では、溝口雄三・菅孝行・松本健一・孫歌らの研究者が竹内好を論じている。

ところで、如上の問題について考えたとき、かならず注意されるのが、文革時期の中国礼賛派の態度である。彼らは、同時代の日本社会を批判する目的のために、社会主義中国を礼賛し、中国の実態を理解しなかった例とされるが、彼らと竹内の文革に対する見方はどう違うのか、という点である。竹内好の研究で出色の業績をあげている松本健一氏は、最新の論文で次のように竹内の文革観を批判している。

戦後の冷戦下での共産主義イデオロギーにとらわれているから、彼[竹内好]の中で共産主義の幻想中国と現実の中国との落差が大きくなってしまふのだ。その一番大きくなった時点が、たとえば文化大革命に対してであろう。竹内は、文化大革命に関しては最後まで批判しないどころか、むしろ非常に好意を持った見方をした。中国の永続革命である、と。この影響を受けたのが高橋和巳で、彼は『新しき長城』で、文化大革命を全面的に評価する。紅衛兵の少年の目は「きらきらと輝いている」、と。つまり竹内は、中国は「永続革命」の国であると言って文化大革命を評価してしまい、あれは毛沢東の権力闘争であるという見方を全くしなくなってしまうのである。そこには、マルクス主義イデオロギーの影響を受けた形ではあるけれども、まさに中国幻想があった。しかし、文化大革命はそうではないと、現在の我々は知っている。そのことをもう一度考え直さなければならない。<sup>(1)</sup>

松本氏が「考え直さなければならない」というのは、「中国幻想」によって見ていたがゆえに見誤った、その向き合い方を考え直すべきだ、という意味であろう。松本氏がそうした再考の必要を切実に感じるのは、「高橋和巳をはじめとする我々の世代、毛沢東の帽子を被り、紅衛兵と同じように『毛沢東語録』を掲げていた「造反有理」の全共闘世代の連中は、ほとんどみんなその毛沢東の権力闘争を見間違った」という、おそらくは実体験に基づく忸怩たる自省がある<sup>(2)</sup>。要するに、中国は優れた国・中国人は優れた民族という「中国幻想」を、マルクス主義への幻想が後押しし、それが目的となって、竹内および高橋和巳・全共闘世代は実態を見誤った、ということになる。全共闘「世代」が中国をそう見ていたかは措くとして、現在から見れば、竹内らが中国の実態を見誤っており、そのよって来るものが中国を礼賛する「中国幻想」だ、という意見には、たしかにある程度の説得力がある。しかし子細を見ると、この意見には問題とすべき点が少なくない。

第一に、竹内が文化大革命に「非常に好意を持った見方」をしていたか、という点。松本氏は1975年の『竹内好論』ではつぎのように述べている。

竹内好が中国革命を永久革命とよんだのは、一種の理想形態においてである。文化大革命や上海コンミュンについて、かれが意見をさしひかえているのは、毛沢東を永久革命論者とよぶに障害となるかもしれない内実を、それらがふくんでいるからかもしれない。そのことが、竹内をして文化大革命の評価などに慎重ならしめているような気がする<sup>(3)</sup>。

この段階では松本氏は、竹内が文革の評価などに「意見をさしひかえている」と言っている。松本氏の意見が変化したのかもしれないが、最新の論文でいう「文化大革命」は広義で、1975年の「文化大革命」は狭義と考えるのが適切である。なぜなら文革は、開始の時期について諸説あるものの、66年5月16日の通知で文化革命五人小組批判が始まり、紅衛兵運動の高まり・大衆による奪権があり、68年9月5日までに全国の革命委員会が設置し終わり、69年4月1日の「中共第9期全国代表大会」で、各地域の党委員会が再構築されはじめた。それゆえ70年代初めの段階では、文革はすでに終了したという考え方もあったのである。たとえば、1974年の『日中関係史の基礎知識』（有斐閣）所収の河原宏「戦後日本の中国像」では、文革を66年から68年と規定し、「文化大革命は二つの路線の闘争であり、激烈な権力闘争だった」といっている。このような事情を考慮した場合、竹内の文革観についても、66年から76年まで続いた動乱という、現在の文革の規定から考えるのではなく、文革の進行に沿った検討をおこなっておくのがよからう。

第二に、そのような検討は、松本氏がいうように、高橋和巳が竹内の文革観の影響を受けて

文革を肯定したのかどうかを確認することも可能とするであろう。

第三に、「中国幻想」という心理による分析。松本氏によれば、日本人の中国幻想は、中国という大国と歴史的に隣り合ってきた日本の地政学がもたらしたもので、遣唐使の時代からずっと歴史的に存在する強固なものだという。このような心理的で大きな概念によって説明するならば、中国をプラスに判断する思考はすべて「中国幻想」となりかねず、生産的な思考を阻害するおそれがある。

第四に、松本氏が「あれ[文革]は毛沢東の権力闘争」という、「現在の我々は知っている」地点から「考え直さなければならない」といっている点。考え直すのは賛成である。が、「現在の我々」は文革について何を「知っている」のだろうか？いまでも文革を「毛沢東の権力闘争」と単純化して考えてよいのだろうか？文革に関する史料や研究を見ると、どうもそうとは思えない。たとえば、北京大学の印紅標氏は文革を分析し、「文化の革命—知識人批判」「政治の革命—党内権力闘争」「社会の革命—官僚主義批判」という三構造の複合体あるいは三つの側面を持つと見ている<sup>(4)</sup>。

それに私たちが「知っている」文革は、マスコミの伝聞、テレビなどのメディアの表象を通じたイメージに強く影響されている。文革の実体験を持たない私たちにとって、文献や史料より、映像や写真などの表象のほうが強烈なのは当然であり、より事実性があると認識される。いまでは、秘密にされていた事柄が映像や写真を通して公開され、それによって事実性の高い認識を得ているから、これにもとづいて当時の判断を反省することが必要だ、と考えやすい。しかしじつは、私たちの文革の実態理解も、竹内当時と同じように、マスコミの伝聞・メディアの表象を通じたイメージに影響されている。それゆえ、当時の実態理解には、日本社会批判という目的による解釈を通じた見間違いがあるが、私たちの実態理解は客観的で解釈を含まない、などと考えるわけにはいかない。したがって、さしあたり問題とすべきは、なぜ竹内は実態理解を正しくできなかったか、それは「中国幻想」とよばれるものが原因なのか、という問題ではなく、竹内はどう実態理解をしようとしていたのか、そこからくみとれることは何か、である。

本稿は、こうした問題を軸に、竹内好の文革観を具体的に追跡してみたい。

## 1、マスコミと中国研究者の文革観

竹内好の文革観を考える前に、マスコミと中国研究者の文革観を検討して、竹内と対照させることにより、その特徴をはっきりさせよう。

文革が始まると、じきにマスコミは中国の情勢を「混乱と無秩序」と報道したようだ。当時

の新聞には、66年7月からすでに、文革における学生・労働者の騒乱や暴力が、非常に多く報道されていた<sup>6)</sup>。有名なジャーナリストである大宅壮一らが現地踏査をして、紅衛兵の運動を「ジャリ革命」と書いたのが66年10月（『週間朝日』10月16日、『サンデー毎日』10月20日）。大宅考察組の大森実が北京の様子を子細にレポートした『天安門炎上』（潮出版）が66年11月。暴力的な批判闘争の写真が日本の新聞に大々的に載ったのは、67年1月27日『産経新聞』朝刊だった。これは、著名な共産党幹部たちが名札をぶらさげられ、後ろ手にジェット機スタイルでさらし者にされた何十枚もの写真が、壁新聞に出ている様子を撮ったもので、日本社会に大きな衝撃を与えたとされる。この写真は、文革が党内の権力闘争であるという見方を強く支持するものとなった。

にもかかわらず、研究者・知識人たちには、マスコミは一部でおこった騒乱を誇大に報道している、と感じられたようだ。彼らのマスコミに対する不信感は相当にひどい。とともに、マスコミ不信を促す別ルートの情報もあった。彼らにとって信頼に足る同業の中国研究者が、現地滞在経験にもとづいて、文革の非暴力性を語っていたことが、マスコミ報道に否定的にならせた要因としてある。

当時、早稲田大学教授だった安藤彦太郎は、64年から2年間、中国に滞在、『中国通信』という随筆を発表しつづけていた（まとめた単行本は66年11月に大安から出版）。66年5月末に、北京大学の党支部書記が書いた壁新聞が、北京大学の党委員会および北京市の党委員会を批判したが、それを『人民日報』が支持する社説が6月1日に出て、それ以降、北京市党委員会を批判する大衆運動が起こった。安藤は「毎日そこ（中共北京市委員会前）へ出かけて行って、中国人の中にまじって」文革のデモを見物した、ということ、『中国通信』に書いている。中国滞りが容易でなかった当時、専門家が述べるこうした言説は強い説得力を持った。とくに安藤が「中国人の中にまじって」とわざわざ書いているところに効き目があったと思われる。それゆえ安藤は、帰国後、「一年の間に百数十回公演をぶって回り」、「原稿をたくさん書い」たとのことである<sup>6)</sup>。

安藤の文革認識では、中国は、生死をかけた、血の流れる革命から、「意識の変革」、「社会主義という土台の上での上部構造変革」を文革で模索している、ということであった。つまり、暴力的な革命ではなく、意識の変革だということである。

もう一人、時代の寵児だった人の発言をあげておこう。本稿「はじめに」で呈示した松本氏もとりあげている、作家で中国文学者の高橋和巳である。彼は67年4月から、朝日新聞社の特派員として現地踏査をし、『新しき長城』と題して『朝日ジャーナル』に連続レポートを発表した。彼の文革認識によれば、文革・毛沢東がめざしているのは、「新しき長城」を築くこと、つまり、「七億の人民の精神」の「自発性」と「その和」であり、「優れて道徳的な哲学」の実験

であるとのことである<sup>(7)</sup>。彼がいう「万里の長城」の比喻は、文革がアメリカ帝国主義の侵略に対する精神的な態勢作りだ、との認識による。

高橋は、「道路で悠然と風をあげている人」、「お尻の割れた特有の子供服から尻をほうり出して走る子供を追う母親」などの日常生活をレポートし、文革中にも日常生活が維持されていることを強調、文革は「基本的には<文闘>による革命」であり、武闘の訴えは、「大量の壁新聞の中のわずかな部分にすぎぬ」という<sup>(8)</sup>。したがって高橋は、編集サイドが期待した、「中国の文化大革命は“武闘”の様相すら見せはじめ[中略]高橋和巳氏を中国に特派して、文革に煮えたる中国の実情を報告してもら」うという狙いを裏切っているのである。

二人はともに「意識の変革」や「道徳的な哲学」「文闘」という、理性の部分で文革を認識していることが確認できる。

## 2、研究者の対中意識

66年秋にあった歴史学研究会の座談会で、坂本徳松は「大宅壮一氏らの考察組ですか、ああいった物を読んで、口ではバカにしている人がその影響を知らず知らずにうけている。これも「高度成長」のマスコミのえいきょうです。読んだら負けですよ」と述べている<sup>(9)</sup>。当時の研究者・大学教師がマスコミ・評論家を蔑んでいたのがよく出ている。しかも、マスコミを資本主義の権化とみており、坂本氏がイデオロギーの観点からマスコミを嫌っていることがわかる。このように、社会主義イデオロギーの観点から中国を好意的に見ているのは、松本氏の指摘の通りである。ただし中国研究者にかんしては、より具体的な問題意識があった。

第一に、中国に対する日本の戦争責任の問題。中国思想史家の西順蔵が1969年9月に発表した文によれば、戦争責任による日本人の自己否定は、他者による否定と結合しなければならず、「中国人民、朝鮮人民そしてベトナム人民によって弾がいされ首をしめあげられることによって日本人民の自己否定、植民地領有の現在の贖いが、はじめて現実となってくる」という<sup>(10)</sup>。この強い罪責感は、中国とは何か、と聞かれて「自分を八つ裂きにする場所」と答えた武田泰淳にも通じる<sup>(11)</sup>。このような真摯な反省から中国と向き合おうとする人々にすれば、マスコミの文革＝権力闘争報道は、いわば自民党内の派閥抗争をおもしろがって報道するのと同じであり、そのヤジ馬根性が我慢ならないのだろう。そのため、マスコミ報道を無視する傾向が生じたのだと思われる。

第二に、中国共産党の道徳性を強く信頼していた点。当時、同志社大学助教授だった山田慶児の意見にそれが見事にあらわれている。山田によれば、66年当時の中国像は、「人間性に対する無限の信頼」と規定できる<sup>(12)</sup>。それがもたらされた印象的な事項をつぎのように挙げてい

る。中国革命の印象は、革命とは社会の最底辺に位置する民衆の、腐敗しきった既成体制にたいする反乱だという単純な真理を確認させたこと、その反乱を指導した革命家たちがほとんど奔放ともいえるまでに柔軟なマルクス主義の実践者であったこと、彼らが世界の辺境を歩き抜く長征を実行したこと、20年に亘って地方政権を維持したこと、人間の自己変革にたいする無限の信頼が生みだした革命軍・革命的民衆がモラルと規律を持っていたこと、である。山田によれば、こうした中国像のなかにこそ、「今日の事態」つまり66年後半の文革を理解する鍵を発見すべきであり、それによりイデオロギー的な反中国キャンペーンを克服して人間的批判を中国にたいして提出できるという。

山田が上に列挙する事項はほぼ時代順であり、要は中国共産党が革命を達成して建国したことを述べている。この中で日本人にとってもっとも印象深いのは、最後に挙げられたモラルと規律であった。戦後の日本人は、日中戦争の敗戦と捕虜の経験から、それを強く認識した。封建地主のほしいままに搾取を許していた農民が、共産党によって規律正しい兵士に変わった。共産党軍と国民党軍の規律の違いは、現地に残って両方から占領を受けたことのある日本の民間人のよく口にするところである。軍・民衆のモラルと規律は「人間の自己変革」によっており、そうした改心は日本人捕虜にも及んだことが、戦後日本人の中国共産党の道徳性に対する信頼の背景にある。この人間変革への信頼感が、文革を人間変革とうけとらせ、「人々の魂にふれる革命」という文革のキャッチフレーズを、精神的な変革として文字通りに解釈させる要因になったのであろう。

山田がこの文の標題にする「中国思想」とは「中国的人間主義」である。それは「人間の自己変革の可能性にたいする不動の確信であり、人間性にたいする無限の信頼の独自の表現」、つまり「いかなる人間もその努力によって、内面の変革によって、無限に理想的人間に接近できる。理想的人間とは聖人とよばれる…… [聖人は] 決して絶対者ではなく、いちばん完全な人間、というくらいに考えておけばよい」。毛沢東中国では「人民に服務する人間、そのために、たえざる自己変革を試みる人間が、聖人である。この自己変革への努力には、ほとんど崇高なものがある」（「中国思想について」頁17～18）。この山田の説は、「聖人学んで至るべし」という明代の思想家・王陽明の信念を毛沢東思想に読んだものであろう。ここには、毛沢東思想を伝統中国思想から読むという姿勢が露わである。このような姿勢は、伝統中国思想の理想主義的な傾向を、現実の人間の政治活動にあてはめようとするものであり、現実を理想化して認識する傾向を招くであろう。このような姿勢は、中国共産党の道徳性に対する日本人の信頼感を強化することになる。

中国にたいする山田の期待は、日本の近代化にたいする反省にもとづいている。「日本人は近代化の優等生だった。中国人は頑迷なる、愚鈍なる落第生だった。秀才は鈍才を笑うことがで

きる。しかし、近代にみちたりることのできない鈍才であるわたしは、中国人の思想的格闘にたいして、共感と敬意を禁じえないのである」という（「中国思想について」頁 13）。「日本人は近代化の優等生」は、竹内好の影響を受けた比喻であろう。それにしても、竹内がいう中国＝劣等生という逆説を自分に引きつけて、近代主義的な立場からすれば「鈍才」だと自称できる山田の無神経さにはおどろかされるが、それは措くとして、「中国人の思想的格闘」とは、高度な思想と文化を近代以前に発展させてきた中国人の、近代化における苦悩を言っている。そして「自己変革」を試みる「中国的人間主義」の下での人民は、「原子化された個人を全体の運動に機械的に従属する存在と化してゆくのではない」のであって、「全体として生き、全体として疎外の諸形態から解放され、「自由の王国」を建設するために、不断の自己変革を試みてゆく。個人の「自由」という概念は、そこに入りこむ余地がないように思われる」というように、「中国的人間主義」が社会主義・コミュン社会へ発展する可能性を見ており、そこにまた、「個人の自由」を基本とする近代主義にたいするアンチ・テーゼを見ようとしている。この論理では、共産党の道徳性が社会主義へ発展する内的な可能性を持っていることになり、共産党の道徳性にたいする信頼は、そのまま中国の社会主義への信頼に直結することになるのである。

山田は67年初頭に1ヶ月ほど中国を視察しており、その際に紅衛兵らによる毛沢東個人崇拜の有り様を見て、彼らの情熱は宗教と変わらないとの疑念を抱くようになる。それでも67年11月の「労働・技術・人間」（『講座中国』第IV巻、筑摩書房）の末尾でつぎのようにいう。「高度に工業化された国家においては、極度に細分化された分業体系のもとで、人間の存在は引き裂かれ、生の目的そのものが見失われようとしている。アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの後進諸国は先進国の経済的な発展からとりのこされ、相対的な隔差はますますひろがり、貧困と病気と無知を克服できないままに苦悶している。中国の労働者階級の歩みは、この両者とともにのりこえてゆく道をさししめすかも知れない。「近代」を克服する契機がそこにひそんでいるかも知れない。「かも知れない」とトーンダウンを伴いながらも、個人崇拜への疑念を措いて、中国が近代を超克する期待感を優先させているのは、66年から67年当時のマスコミの混乱と無秩序という報道より、共産党の道徳性に対する信頼と、そこから導いたみずからの論理のほうが、中国の実態に正しく向き合っていると思えたことをあらわしている<sup>(13)</sup>。

### 3、竹内好の文革認識

上に数人の中国研究者の文革認識を見てきたが、竹内も同じように、文革について認識・発言していたのだろうか。じつは、そうではない。彼は66年から67年にかけて、文革への言及を極力避けていたのである。66年12月に発表されたある文で、つぎのように述べている。

「もう一つの思い当ることは、紅衛兵問題である。これについて私は一度も発言していない……ただただ新聞報道の深謀遠慮に舌をまくだけなのだ。ある日、突如として、北京の街頭に暴動が発生したかのような報道ぶりは、読者にショックを与え、それによってもはや不感症になっている中国問題への関心を引きもどそうとする深謀遠慮としか考えられぬではないか」<sup>(14)</sup>

造反派が上海で奪権した事件の報道について、67年1月15日『朝日新聞』で竹内は、つぎのようにいっている。

判断の材料は十分でないが、それほど大きな動乱が起きているとは思えず、これで革命が挫折することもないと思う。[中略]日本から中国を見る場合、留意すべきことは「過去数十年、日本人は中国について判断を誤り続けてきた」という事実である。[中略]中国はいま、新しいものを生み出すため非常に苦しんでいるが、その新しいものは中国にとってだけでなく、人類にとっても新しいものとなる。だからこれをヤジ馬的興味でなく、大きな視野で見守ることが日本人にとっても新しいものとなる。<sup>(15)</sup>

この二つの文にはともに、新聞報道に対する竹内の憎悪があらわである。後者によれば、過去(戦前)の誤った報道と、今回の文革報道が同種の態度なので、今回の報道も誤っているおそれがある、というのである。つまり、報道が持つ態度によって、報道の重大性をさしひいて断じている。

現在の研究によれば、前者は66年8月下旬におこった「四旧打破」による紅衛兵の暴行事件であり、統計では、8月26日から9月1日にかけて、北京だけで毎日100人から200人以上が殺害された。後者は「康平路事件」(高橋和巳も「新しき長城」で述べている)とその後の奪権である。この事件は、上海市で初の大規模な武闘であり、81人が負傷する流血事件となった。多くの赤衛隊員は迫害されて逃亡、運輸関係は指揮系統が無人となり、大混乱に陥った。これが発展して、竹内が言及している、いわゆる「一月風暴」がおこる。これは、張春橋・姚文元・王洪文ら、のちに四人組となる者たちが上海の権力を奪取し、奪権闘争が全国に広まる第一ステップとなった事件であった<sup>(16)</sup>。いずれの事件についても、竹内は過小評価したのであるが、その要因は報道の態度に対する不信感に起因している。日本の中国報道に対して、68年8月に、「わからない」という意味」でつぎのように述べている。

欲すればいつでも正しい認識が得られるように安易に考え、自分勝手な意見が横行してい



る現状について、いわばその精神の怠惰が私には不満なのである〔中略〕その報道ぶりには、過去の日本が侵略国であった時代の失敗が是正されずに残っている〔中略〕権力闘争と、社会的混乱としてとらえる見方である。これは今度はじめてあらわれたのではなく、過去数十年にわたって、軍閥時代からの報道の型のくり返しなのである〔中略〕スポーツの実況放送を見るような気持ちで見ていたのでは本質はつかめない<sup>(17)</sup>。

「侵略国であった時代の失敗」は、中国を下に見る、侮ったまなざし。「スポーツの実況放送」は、自分とは関係のない、よそ事を楽しむようなまなざし。いずれも、中国への共感がない。中国をこのように見るのは、「精神の怠惰」として否定すべきである。その「精神の怠惰」は、日本を侵略戦争へと導いた一端であり、それを否定しないのは、侵略戦争の非を反省しないと同義だというのである。

この慎重さは、写真メディアについてもあてはまる。67年2月、中国の政治家が看板をさげて後ろ手にジェット機スタイルをさせられている写真（前述『産経新聞』）を見て、竹内はこう語っている。

明大騒動の机をつみかさねた写真をみせられて、日本の社会は非常に混乱期にある、と考へたらおかしいことになる。〔中略〕底流としての民衆生活の変化がたしかめられない以上、是非の判断を下せない<sup>(18)</sup>。

竹内は、写真の被写体の吟味をせずに、それが社会の一部を撮ったものにすぎないという点だけから、判断を保留している。これは、写真の視野は極めて限られている、という一般的な批判にすぎないようであるが、竹内にとってはそれだけではない。「底流としての民衆生活の変化がたしかめられない以上、是非の判断を下せない」、つまり民衆生活が混乱しているなら、文革は報道のとおり混乱と無秩序であるが、それが確認できないのでは、写真は一部の騒動を写しているにすぎない、というのである。

以上は、報道の姿勢についての竹内の見方から、文革にたいする判断の慎重さを考えてみた。しかし、それだけが要因ではないように思われる。

前述のように、66年末に竹内は紅衛兵問題について「一度も発言していない」と述べている。つまり、竹内が紅衛兵に言及しないのは確信犯なのである。これは、報道の姿勢の問題、および「底辺としての民衆生活」がわからないという現状だけでなく、松本氏が75年に推測したように、紅衛兵をどう考えるかが彼にとって大きな問題に結びついているために、かるがるしく判断を下せなかったのではないだろうか。

66年夏から67年初頭に報道された紅衛兵のイメージとは、100万人集会の映像『毛主席は100万人の紅衛兵とともに』あるいは10月1日国慶節の映像など、66年当時の日本人でもメディアを通じて見ることできた毛沢東への個人崇拜と、「四旧打破」と知識人や幹部への暴行、労働者や紅衛兵同士の武闘などの報道でいろいろとされていた。もし報道が正しいとすれば、竹内にとってそれは、毛沢東という「カリスマ」によるウルトラ・ナショナリズムの発現かと危惧されたのではなかろうか。

竹内にとって、ナショナリズムとウルトラ・ナショナリズムの問題は、非常に重要である。55年の「アジアのナショナリズム」、61年の「方法としてのアジア」などによれば竹内は、中国革命のナショナリズムに、たんなる民族の統一と独立のエネルギーを見ただけでなく、弱者の連帯の可能性を見だし、近代主義的な人間を変革して西欧的価値をのりこえ、西洋を第三世界から包み込んでしまう（毛沢東の農村から都市を包み込む）普遍性を見ようとしていた。じつは、日本の戦前のナショナリズムにも、その可能性があった。しかし日本人は、それをウルトラ・ナショナリズムにまで暴走させてしまったがゆえに失敗したのである。

そのナショナリズムの可能性を竹内は、60年代の中国にも見ようとしていた。つまり、毛沢東の中国革命の延長上で60年代を見ようとしていた。しかし、その見込みは動揺しつつあったのではなかろうか。63年のある文で竹内は、堀田善衛の言葉を借りつつ、アメリカ・ソ連流の平和論と中国流の平和論を超えたものを日本人が提出すべきだ、と考えている<sup>(19)</sup>。それは、中国が核実験をしたことへの反作用として考え出された要求であった。ここには、核保有による中国の軍事大国化に幻滅する気持ちがうかがえる。このとき竹内は、中国のナショナリズムが、民衆のナショナリズムから、大国のナショナリズムに変質しつつある、との疑念を抱きはじめていたと思われる。竹内自身はその疑念を明言していないが、当時、中国のナショナリズムのこうした変質に気がつき、明言している者もいた。批評家の檜山久雄が66年4月の段階で「いま中国ナショナリズムに転換が起こりつつある」と指摘している<sup>(20)</sup>。つまり、かつては民衆の反権力民主主義運動によって支えられ、発展してきた中国ナショナリズムが、革命が成功して権力と合体して以後、その反権力性を喪失して、いまでは逆に民衆の民主主義運動を阻害する要因として働いているのではないか、という疑念である。竹内は、文革開始時期すでに、中国革命への期待と中国の変貌への幻滅のはざまにあったのではなかろうか。

#### 4、竹内好と『夜明けの国』

竹内好が、66年夏から67年初頭にかけて、文革を論じようとしなかったことを上に述べた。その竹内が文革を扱った映画を見て、その感想文を書いている。67年10月の随筆「夜明けの

国』である。このテキストは、従来の竹内好研究ではまったく扱われてこなかった。それはなぜかといえば、竹内が見た『夜明けの国』というドキュメンタリーを鑑賞することが現在では困難であり、それゆえ竹内が文中で述べていることを正確に理解できないからである。あるいはまた、従来の中国研究者は映画というメディアを軽視して、その感想文にすぎないテキストを正面から扱おうとしなかったからかもしれない。

『夜明けの国』（時枝俊江監督、岩波映画製作所）という映画は、66年8月から67年1月まで北京・瀋陽・長春・ハルビン・撫順・鞍山などで現地撮影している。当時、日本は中国と国交回復をまだはたしておらず、メディアの取材が厳しく制限されていた。そんな中で、日本の民間映画会社が現地に半年も滞在して撮影してきたのは画期的だった。おりしもロケに入った66年8月は「プロレタリア文化大革命についての中共中央の決定」が発表され、天安門広場で文化大革命を記念する100万人集会が開催、軍服に赤い腕章をまいた何千という少年少女たちの紅衛兵が人々の前に登場したときだった。それゆえこの映画は、戦後「新中国」の状況を伝えるだけでなく、はからずも文革の最新の情勢をカメラにおさめることとなった。67年10月末に公開され、竹内は試写会でこの映画を見て、感想文を書き、その文は岩波書店『世界』に発表された。これとはべつに、映画の公開時パンフレットおよび16ミリ版のパンフレットにも「これが人間の生活だ」と述べる寸評を載せている。

従来、看過されてきたこの感想文だが、この映画に対する竹内の思い入れは軽視できない。「万感胸にせまる」と書きだして、全集版で4頁にわたって書いている<sup>(22)</sup>。「眼がうるんでくるのをどうすることもできない」ともいう。舌鋒鋭く論争をおこし、60年安保闘争でも「民主か独裁か」という強烈な意見を提出した竹内が、1本のドキュメンタリー映画に、柄にもなく涙を流すとは、竹内を読んだことのある者なら誰でも奇異に感じるだろう。そこで、この映画のどういう点に竹内が感動しているか見てみよう。「万感胸にせまる」と書いたあと、彼はおぼつかないながら、その胸にせまったポイントを摘記しはじめる。

はじめは、撫順炭鉱の様子である。「巨大なすり鉢形の露天坑を、固定カメラがロングで、かなり長い時間映し出す。露天坑の内側の斜面に、ほとんど数えきれないほどの線路が敷かれていて、その線路の上を、右に左に、重なり合うようにして長い貨車の列が動いている。こういう自然の景観（というほかに言いようがない）は、それだけで私の感動をさそう」。ここでいう「自然の景観」とは、人間が自然との格闘の中から作り出していった、大自然と人間の力のアマルガムとしての景観であり、竹内の独特の自然観をあらわしている。

これをうけて、つぎに画面が映した坑夫たちの存在に話が及ぶ。「あれがむかしの濫掘の跡です、とひかえ目に指し示したところをカメラが映し出す。ここで長いあいだ、ナレーションが途絶える。私は自分の眼がうるんでくるのをどうすることもできない。「むかしの濫掘」とは

日本人の濫掘をいう。彼ら坑夫たちは年齢的にって戦前の日本統治時代を知っている。その彼らが、本当ならば日本人の戦前の行いを非難してもいいはずなのに「ひかえ目に」遠慮しつつ、戦前を忘れていないことを示す。ここで竹内は、日本人の戦争責任の問題とそれを許そうとする中国人の複雑な感情に思いを馳せているのであろう。そしてそれは、大自然と日本人のアマルガムである場所を継承しており、後に述べる満蒙開拓団への連想の伏線となっている。

「つづいて土饅頭が延々とつらなっている場面が出てくる。これは万人の墓とよばれるそうだ」。これを竹内は、日本人の戦争責任の表象と見ている。「極限を愛するいまの映画ファンには、なまぬるい感じがするかもしれない。アウシュヴィッツの比ではない、とかれらは言うだろう」。アウシュヴィッツが想起されているのは、死体を埋めてある土饅頭に、アウシュヴィッツ収容所を撮った有名なドキュメンタリー『夜と霧』（アラン・レネ監督、1955年）の、遺体をブルドーザーで集めて土に埋めるシーンの残影を見たのではなかろうか。ただし、じつは「万人の墓」は撫順炭鉱の近くにあるものではなく、遼源という場所であることが字幕によって示されている。したがって、この土饅頭はもともと日本人の戦争責任と関連がないのに、撫順の「むかしの濫掘の跡」というシーンの直後に置かれたことによって、日本人の戦争責任の表象と竹内は読んでしまったのである（もちろん監督はそう読まれることを狙った）。

アラン・レネの描いたアウシュヴィッツの極限状態に対して、『夜明けの国』をそのような観点から批評することは当たらないとして、竹内は自身の人間観を披瀝する。「人間は日常性において人間であり、したがって愛も憎しみも、日常性において最大に発揮される、という人間観に賛成し、その点私と共通するらしいこの映画の制作者たちを支持する」。それゆえ、松花江の水浴シーンに感動するのは、それが日本人と同じ日常生活だからである。

また竹内は、中国の生活における戦前・戦後の連続と断絶を観察している。子供が「お尻の割れたズボンをはいている風俗は、むかしと変らないが、そのズボンに継ぎが当たっていない点は変化である」という。

この戦前との連続の上で満蒙開拓団が想起される。「収穫がおわって、土が凍る前に必要な耕土の段階で、日本のそれの何倍もある巨大なトラクターが画面にあらわれたときは、かたずを呑んだ。怪物のような爪をもった幅のひろいトラクター、それを若い女がひとりで運転する。周囲は見はるかす無人の曠野である。ああ満州！どうかここでは「満州」と言わせていただきたい。植民主義者ならぬ善意の植民者たちの夢が見事にみのった、と思わずにいられない」。

以上のように竹内の感動のポイントをみると、一般人の日常生活に注意し、その戦前との連続と断絶を捉えていることがわかる。

しかし、67年10月公開当時、文革発動からすでに1年が経ち、66年8月からの半年を中国でロケしたこの映画に、紅衛兵の映像を期待する方が当時としては自然ではなかろうか。それ

なのに、この感想文で竹内は、紅衛兵について一言も触れていない。この映画は、当時すでに知られていた紅衛兵の暴行をまったく撮影していないが、関心さえあれば、紅衛兵の実際の様子を写した映像として興味深いはずである。たとえば、堀田善衛はこの映画を見て、紅衛兵のシーンに感動したことを明言している。「東北の奥のほうから、テクテク、テクテクと、若い坊やたち、紅衛兵が歩いて北京まで行くわけでしょ。あれは“長征”だと思ったな。[中略] 紅旗をかついで、東北の曠野を少年たちが歩いて行く風景はとても印象的だった」<sup>(23)</sup>。つまり、竹内がこの映画に紅衛兵を読みとらなかった点にこそ、彼の文革観の特徴があるともいえるのである。

## 5、竹内好の文革認識の特徴

竹内は67年秋くらいから文革について語り始めるが、それ以前は、文革を語るべきときにも語らずにいる。67年9月の「革命と伝統」でも、読者をもっとも読みたいであろう文革・紅衛兵については語らず、中国人の革命観が縷々述べられる。それによれば、日本人にとって「革命」は、突発的で「非日常」の極にあるものだが、中国人にとっては「日常」、「生存のために不可欠なもの」であり、「長い過程」「反復する過程」として表象される。中国人にとって革命は日常であり、「自分と内的関連を持った、日常性と切りはなせないものだという観念にたつなっている」と<sup>(24)</sup>。

67年後半に入ると竹内は、わからないと言いながらも、文革について論じ始める。67年11月に専修大学の学園祭での講演「明治維新と中国革命」では、つぎのように述べている。

中国人からしますと、革命というのは自分たちの日常に密着したものである。一日の生活がそのまま革命につながるという考え方である。もう一つ、革命は終りが無い。はるかなる毎日の営みであるが、同時に半永久的なものである。非常に長期の過程であるという考え方、この二つがセットになっている……今度の文化大革命と呼ばれているものも、この長い過程の中の一つの段階であると彼ら自身は考えているわけです。(頁158)

ここでは、文革を革命の長い過程の一段階に明確に位置づけている。

68年になると、さらにはっきりと文革に対する分析を述べる。8月の「わからない」という意味によれば、中国では、アメリカの侵略に備える必要が、65年あたりから生じた。アメリカに対抗するには、抗日戦争の経験から、国家防衛方式ではなく、人民解放戦争方式、すなわち「人民の自発性に期待する方式」しかない。文革において、30年代の記憶が喚起されている

のは、そのためである。しかし、国家建設から20年が経ち、体制化がすすんで、「膨大な官僚層」によって、国民政府とおなじ「現状維持の停滞した気分」が生じた。だから、それを「内部からつき崩す」ことなしには、アメリカの侵略戦争に対して「有効な態勢がつかれない」。それで「各種の実験」がおこなわれているのだ、と。

この文革認識の特徴は、60年代後半を、30年代のアナロジーでとらえている点である。「混乱」に見えても、30年代がそうであったように、民衆の日常生活は、「自発性に期待する方式」に進んでいる。つまり、侵略する者が30年代の日本から60年代のアメリカに、30年代の国民党が60年代の体制内官僚層におきかわっただけである。そうすると文革は、戦後の体制化によって失われた革命ナショナリズムをとりもどす革命だ、ということになる。

前述のように、60年代の核保有あたりから、竹内のなかで中国への幻滅があり、66年の紅衛兵に対するイメージから、革命ナショナリズムがウルトラ・ナショナリズムへ変質する危険を感じていたのではないかと推測したが、その竹内が、67年後半には文革を革命ナショナリズムの過程に位置づけるようになった。さらに60年代前半の中国を体制化・官僚化でとらえた上で、文革を反官僚主義から捉えなおし、革命ナショナリズムをとりもどす革命だとの認識に変化した。66年夏以来の文革＝権力闘争・混乱・武闘という報道を無視する彼にとって、こうした認識変化の根拠になったのは、なんだったのか。67年1月以降の奪権と革命委員会の設立などの情報からの推理が深まったと自認したのであろうが、その自認の要因の一つに、ドキュメンタリー『夜明けの国』があったのではなかろうか。

『夜明けの国』で竹内が感動したシーンを前述したが、彼はこの映画を見て、自分の中国認識についてこう述べている。「国家計画に応じて民衆生活の上でどういう変化があらわれるかという点については、私の想像力を絶するような突然変異に類するものは〔この映画に〕何もなくなかった。というよりも、自分の想像力に自信を強めた」と。文献などによる自分の中国像に自信を深めたというのである。この「突然変異」とは、毛沢東をカリスマとして暴行を働く紅衛兵を想起させる言葉である。「もし想像を絶するものを強いてあげるなら、一つだけある」と言っ、て、紅衛兵のことを想起させるかのようなそぶりを見せて、「それは、画面に登場する人物が、どの一人として、顔がリップでないものがない一事である」とまったく逆のことへ話題を向ける。「あれが演技だろうか。もしそうなら、私の中国観は根底からくつがえるだろう」（『夜明けの国』）。マスコミの報道を信じず、幹部が後ろ手にジェット機スタイルで暴行されている写真も信じない竹内が、この映画では「あれが演技だろうか」と確信している。

右に見てきた、竹内の文革認識を考慮すれば、彼はこの映画の、日常生活を扱っている点に注目したであろうことが推測できる。しかもこの映画では、紅衛兵のイメージ作りに反復して使用された、天安門広場での毛沢東の接見の記録映画が引用されているが、それが吉林省の山

村の野外で放映されているのが映される。つまり、紅衛兵の非日常的な毛沢東崇拜と、一般人の日常生活が同時に対置されているのである。文革における北京での興奮の背後に、「底流としての民衆生活」が映っている。これこそ、戦前から基本的には変わらぬ「長い過程」であり「反復」であると竹内は見たのではなかろうか。

しかも、竹内の考える民衆には、満蒙開拓団（日本人）も含まれている。「ああ満州！善意の植民者たちの夢が見事にみのった」と彼は叫ぶ（「夜明けの国」）。『夜明けの国』という映像によって、中国の民衆が、東北の曠野でアメリカという近代帝国主義に対抗している姿が証明された。それは、同じくアメリカに対抗して、アジアの解放を求めて満州の曠野で働いていた日本の民衆を継いでいるのである。中国の民衆が日本の民衆を継いでいるのは、日本の民衆の善性を証明することになる。『夜明けの国』の表象から竹内は、中国の文革が日本の果たせなかつた夢＝アジアの解放を成し遂げようとし、日本の「アジア主義」を継ごうとしていると読みとつたのではなかろうか。それゆえ彼は、自分の文革観に自信を持つようになったのであろう。

竹内が『夜明けの国』の人々の「顔がリップでないものがない」といった点を考えてみよう。当時、現地を訪れた日本人が、現地の人々の表情について語った記事が散見する。高橋和巳は、紅衛兵の少女が「大交流で北京におもむき[中略]毛主席に会いました、と目を輝かし、頬を紅潮させながら、語った。[中略]この文化大革命の基本線は、必ず実現されるだろうと感じた」という<sup>(25)</sup>。歴史研究会の坂本徳松も、「紅衛兵たちは[中略]目が澄んでいるし、無邪気で顔が明るいし、やっぱり社会主義建設がされていないとああいう明るさが出てこないのかもしれない」という<sup>(26)</sup>。こうした感想と竹内の感想は似ているが、同質ではない。なぜなら、高橋らは紅衛兵について語っているが、竹内は一般の人びとについて語っている。竹内は『夜明けの国』に登場する紅衛兵には、意識的に言及を避けている。竹内にとって紅衛兵は、文革において特殊な役割であって、見るべきなのは日常生活を送る民衆なのだ。その点、『夜明けの国』が、紅衛兵の過激な行動にカメラをむけず、一般の人びとの日常を追求したところに、マスコミ報道ではありえない、中国の真実がうかがえると竹内は見たのである。それゆえ、高橋らが見ているのは「目」であり、竹内が見ているのは「顔」である。これは一種の隠喩であって、「目」は「非日常」の情熱を語っており、「顔」は「日常生活」を語っているのである<sup>(27)</sup>。

## おわりに

竹内好の再考を強調する加々美光行氏によれば、戦後、社会科学・人文科学としての現代中国研究は、日本の政治経済面に目的意識を持った観点から中国を研究したのではなかった。その結果、現在の中国研究は、「日本社会に対する日本人としての批判的省察を基礎とした日本改

造・変革を目的論としてもちえないまま行われている」。現代日本の中国研究は、學術そのものを目的としているようで、じつは「自由主義的近代化を普遍的、肯定的に評価し、それゆえ自由主義的近代化の原理によって内外政治を展開する日本の現状を肯定している」ところに問題があり、この点にこそ、竹内の方法を再考する必要がある。竹内の方法には、ある目的のために中国研究に価値判断やイデオロギーを持ちこむ傾向があった。そして戦後としては例外的に、60年代の文化大革命時期の中国礼賛的な中国研究には、中国国内の情勢によって日本社会の病弊を批判し変革しようとする方向性があった。竹内は文革礼賛派ではないが、方法的には60年代の中国研究者と共通していた<sup>(28)</sup>。

加々美氏が言うように、竹内は日本への照射を目的に中国研究をしていた点で、文革礼賛派と共通しているが、文革をひとまず66年から68年まででくくった場合、その方法の視点は文革礼賛派とかなり異なる。竹内は民衆の日常生活に視点を置き、文革を底流としての中国革命の一端と考えていた。もし現代において竹内の方法を再考するとすれば、この視点が課題として残されているのではなかろうか。ただし、竹内においては底流とそれをリードする毛沢東思想・共産党とが同一性を持っていたが、現在ではリードするはずの上部構造は底流から切断されている。底流部分にはいろいろな生活と世界観がうずまいているのであり、その点こそを私たちは考察し認識することが現在求められているのではなかろうか。上部と底流とは、ともに「中国」と呼ばれつつも、整合的ではない。私たちが「中国」という言葉を使用するとき、その上部だけを念頭に置いたり、底流部分の素朴さだけをとり出したり、悠久の歴史とむすびつけようとする習性があるのではなかろうか。底流部分もその上部の共産党一党独裁との関係において底流なのであり、竹内にも見られたような、日本の日常生活との共通性に「共感」するような観察方法では認識しきれないであろう。

日本への照射を目的とした竹内の方法は、日本の現状を変革しようとする点で、現在の中国研究への批判たりうる性質を持っているのではあろう。しかし、このように中国と日本を鏡の関係でとらえる方法は、その研究がナショナルなものに収まることを前提としている。研究者自身が日本の内側・中央へと向かうベクトルを持つ。これが可能なのは、特殊日本的な状況ではなかろうか。むしろ重要なのは、竹内が考えたのとはちがって、日常生活の底流部分にある中国の多様性を認識することであろう。これは、研究者自身がナショナルなものから切り離されるベクトルを持ちうるではなかろうか。

## 【注】

- (1) 松本建一「共産党王朝が倒れる時—中国幻想の行方」『大航海』2008年3月、No.66。



- (2) 同前。なお、松本氏がいう全共闘世代の中国幻想は、いまや、中国は経済大国になるという幻想に形を変えており、「経済至上主義から見たイデオロギー」となっていることをこの論文では強調している。
- (3) 『竹内好論』もと第三文明社、1975年、いま岩波現代文庫、2005年、頁85。
- (4) 印紅標「中国人の文革観」土屋編著『目撃！文化大革命』太田出版、2008年、所収。
- (5) 前田年昭「教育革命いまだ成らず」土屋前掲書所収。
- (6) 『講座 現代中国 III文化大革命』大修館書店、69年9月、頁252。
- (7) 高橋和巳「新しき長城」『朝日ジャーナル』67年5月21日。
- (8) 高橋「新しき長城」『朝日ジャーナル』67年6月11日。
- (9) 藤島宇内・野原四郎との座談会「東アジアをどう見るか」『歴史評論』197号、67年1月。
- (10) 前掲『講座 現代中国 III文化大革命』頁279。
- (11) 武田泰淳・竹内好「私の中国文化大革命観」『文芸』67年7月号。
- (12) 山田慶児「中国思想について」『現代の理論』66年12月号、『未来への問い—中国の試み—』筑摩書房、68年、頁8～13、17。
- (13) その一方で山田は、文革における武闘の現実を認識していたと思われる。67年1月の上海における革命委員会設立をめぐる武闘について、つぎのような現地の造反派紅衛兵の説明を記録している（山田前掲書「コミュニオン国家の成立」頁60）。「保守派の赤衛隊はレンガを布でつつんで窓から投げこみ、門を熔接器でとかして接近し、竹で革命派の眼をつきさしました。また消防隊のハンゴ車をつかって窓から屋内に侵入してきました。造反隊は二〇〇人が負傷し、うち二〇人の重傷者をだしました。しかし、革命派は屈服せずになんばりぬきました。九日間、昼夜ぶつとしてがんばった造反隊にたいし、上海委員会はついにその要求をのんだのです」。
- (14) 竹内「転身中の「異議あり」」『展望』66年12月、96号。
- (15) 竹内「中国の激動をどう見る」『竹内好全集』第11巻、筑摩書房、1980年、頁299。
- (16) 陳東林ら主編『文化大革命事典』中国書店、1996、頁1066
- (17) 竹内「「わからない」という意味」『月刊社会党』68年8月号、『竹内好全集』第11巻、頁302。
- (18) 竹内『週間朝日』67年2月24日、「この『一枚の写真』をどう見るか」『竹内好全集』第11巻、頁300。
- (19) 竹内「中国問題についての私的な感想」『世界』63年6月、『竹内好全集』第11巻、頁270。
- (20) 檜山久雄「日本ナショナリズムの頽廢」『現代の眼』66年4月。
- (21) 野原四郎は、66年11月に「これまで最もよき中国理解者として、自他ともに許してきた

マルクス主義者やいわば中国びいきといわれてきた人びとが、中国に対する幻滅感をいだき始めた」といっている(「思想の言葉」『思想』岩波書店、66年11月)。中国現代史を専攻する野原が、「最もよき中国理解者」といったときに、竹内がそこに入らないとは考えにくい。野原からすれば、66年の文革・紅衛兵問題に対する竹内の沈黙は、幻滅感の表現に思われたのではないか。菅孝行氏も、60年代以降の中国政治に対する竹内の沈黙を「中国の現実へのある種の幻滅の結果」ではないか、と述べている。ただし、本論で述べるように、竹内は67年には文革についての考えを説くようになる。

- (22) 竹内好「夜明けの国」『世界』1967年11月、『竹内好全集』第4巻。
- (23) 武田泰淳・堀田善衛『対話 私はまだ中国を語らない』朝日新聞社、1973年。
- (24) 竹内『講座中国Ⅰ』「日本・中国・革命」筑摩書房、1967年9月、頁17。
- (25) 高橋「新しき長城」『朝日ジャーナル』67年5月28日。
- (26) 前掲「東アジアをどう見るか」。
- (27) 竹内が「顔」をみるのは、『夜明けの国』のカメラが「顔」を撮っているからでもある。『夜明けの国』が「顔」を撮って「日常」に目を注ぐのは、おそらく竹内とは別に、60年代日本における「日常」への反省が反映されているのであろう。60年代の日本人にとっての日常生活の問題は、高度経済成長という資本主義下における人間の疎外として議論された。高島通敏「日常の思想とは何か」(『日常の思想』筑摩書房、1970年5月)の総括によれば、戦前から戦後へ、日本人にとっての日常生活は変転をとげた。戦前の日本は、戦争と天皇制による「非日常」の生活をおくった。それが、戦後民主化によって「日常」をとりかえた。ところが、資本主義体制・経済成長により、「日常」は陳腐化し、窮屈な会社勤めに代表される「日々のくり返し」、マイホームとレジャーに堕した「日常の疎外」が問題となっていた。60年代とは、この「日常の疎外」の克服＝「日常性の克服」を探究しようとしていた時代であった。そのとき『夜明けの国』の撮影クルーは、中国の民衆にカメラを向ける機会を持った。その点で『夜明けの国』という映画は、本文に見た山田慶児の説のような「疎外」からの脱出を、コミュニン社会あるいは社会主義にたいする期待として、濃厚に帯びているといえるのである。つまり、60年代日本の「日常性の克服」の探究を反映した表象に、竹内は革命を日常とする中国を見たのである。
- (28) 加々美光行『鏡の中の日本と中国』日本評論社、2007年、頁80・87。

※本論文は、平成19年度専修大学研究助成(「現代中国文化への映画表象の影響」)による成果の一つである。